

脇村義太郎『趣味の価値』における切手の世界

脇村義太郎（1900－1997）は、日本の経済学者で、経営者の役割、海運、石油、経営史などを専門領域とし、また絵画の蒐集や批評など文化面での活躍でも知られていた。東京大学名誉教授、日本学士院院長、文化功労者など銘々たる履歴の持ち主であった。代表作は、『脇村義太郎著作集』（日本経営史研究所）に収録されている。脇村はまた切手についても造詣があり、その見識は『趣味の価値』（1967、岩波新書）の「国際商品としての切手」に明瞭である。出品者は、脇村をはじめ、日本の経済学者たちが関心を持っていた切手を蒐集することをここ数年行ってきた。今回は、脇村の前記著作における切手への関心を中心にして、関連するマテリアルを含めて作品を構成した。特に脇村の切手論は、政治的なプロパガンダや経済的側面への注目など先駆的な貢献を示していることに注目した。また最初の渡欧時（1935－7年）の書簡集をみると、脇村が一貫して郵便物に注意を払い、その時々状況にふさわしい絵葉書を母国に送っていたことにも注目する。さらに脇村の関心を現代的话题にまで結び付けて、最近の切手についてもできるだけ示すことで、脇村の切手観の現代的意義も考慮した。

展示プラン

脇村義太郎の船切手への関心 2

脇村義太郎と船のかかわり：靖国丸と欧米留学 3-5

脇村義太郎と船のかかわり：汽船と欧米留学 6-8

切手の経済的価値

切手発行益 9-11

切手の経済的側面：規制 12-15

国際宣伝としての切手の発行 16-21

美術切手への関心 22-25

美術蒐集と石油人 26

石油切手への関心 27,28

切手蒐集家とその「切手資産」 29

マルクス切手と日本の経済学者 30,31

『油槽船の研究』に挟まれた書状 32

おわりに 脇村義太郎の業績を切手解釈から照射する



脇村義太郎（1900－97）



参考文献（シート中に掲げたもの以外）

脇村義太郎（1952）『石油』岩波新書

脇村義太郎（1957）『中東の石油』岩波新書

田中秀臣（2019）「マルクス、レーニンの切手とプロパガンダ」（『経済学史学会報告集 2019 年』所収）

『趣味の価値』で、切手蒐集をテーマ別で集める人たちがいることに言及し、脇村は実例として、マルクス切手、音楽切手、そして船切手などについて言及した。「海や船に興味を持つ人が多いが、したがって船の切手を蒐めている人も少なくない」(『趣味の価値』116頁)。脇村は当時の船切手の総数が多いことで全部の蒐集は困難であること、また時価が最高額であるギアナ切手(1856年)が、船の図案なのでその面からもハードルが高いとした。また米国やスペインなどのコロンブス切手の発行にも言及した。そして「船切手でも汽船にかぎって集めるならば価格は高くなく、それほど困難ではない」(117頁)とした。ただし脇村の著作から半世紀以上が経ち、汽船切手の完収も難しい。

ギアナ切手をテーマにした切手(ガイアナ発行)

英領ギアナの1セント(マゼンタ(赤色)1セント)は、現存一枚しかなく、脇村の時代では時価10万ドル(現在の時価では約1億8千万円)だったが、最近のオークションでは830万7000ドル(約13億円)で落札された。実物を見たことがある郵便学者の内藤陽介氏の出品者へのご教示によれば、実物は左端の図像に近い印象だという。

ガイアナ(2014年)



ガイアナ(1967年)



コロンブス切手への注目

「アメリカのだしたコロンブス博覧会の記念切手の中には100ドル以上(令和6年だと18万円ほど)するものもあるようだ。コロンブスについてはスペインはむろんのこと中南米諸国から近年ポルトガルもシリーズで記念切手を出している。合計すると相当の数になるだろう」(脇村、117頁)。

コロンブス博覧会(1893年)



スペイン：アメリカ発見シリーズ(1930年)



脇村義太郎と船のかかわり：靖国丸と欧米留学

脇村が汽船切手にこだわったのは蒐めやすいだけではなく、彼の欧米留学時代（1935-7）での汽船の旅も影響している可能性がある。没後に出版された欧米留学時代の書簡集『欧米留学だより』2000年、脇村友雄発行：非売品）では、汽船による船旅を楽しみ、その都度、汽船に関する絵葉書を本国の家族宛てに送っている。ここでは脇村が当時、送った絵葉書と同図案を集め、また関連するマテリアルを掲示する。

往路での靖国丸

日本郵船の代表的な豪華客船であった靖国丸の一等船客として脇村は乗船した。「御乗船記念芳名録」によれば、経済学者の山田雄三（東京商大）も乗船していたことがわかる。脇村は乗船第一日目の夜にさっそく家族宛てに手紙を書いた。以下はその絵葉書と同図案であり、また本文は『欧米留学だより』からコピーしたものである。



和歌山県田辺町中屋敷町

脇村市太郎様

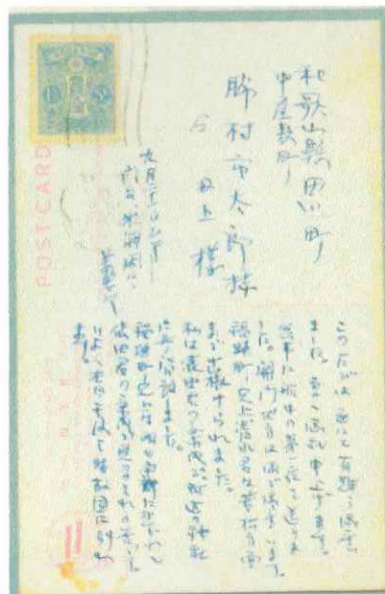
全 母上様

九月二十一日正午

門司、観潮閣にて

義太郎

故国を離れる前の最後の葉書



靖国丸が無事、ロンドンに到着したことを知らせる日本郵船からの葉書。ここでは同じ船に乗っていた山田雄三の実物を掲示する。脇村のものも同図案、同内容である（前記書簡集に収録）。絵葉書の通信欄の方が実物で、絵（写真）の方はコピーを添付。



葉書（表）：船上園遊会の一景



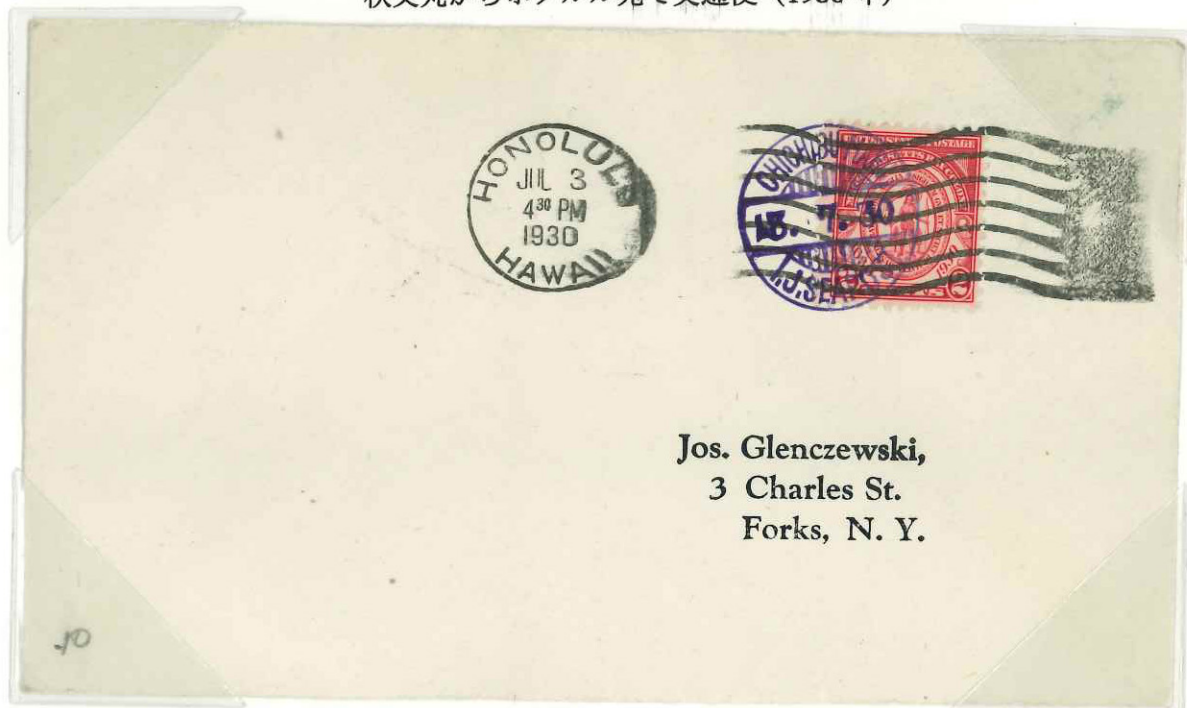
脇村義太郎と船のかかわり：汽船と欧米留学

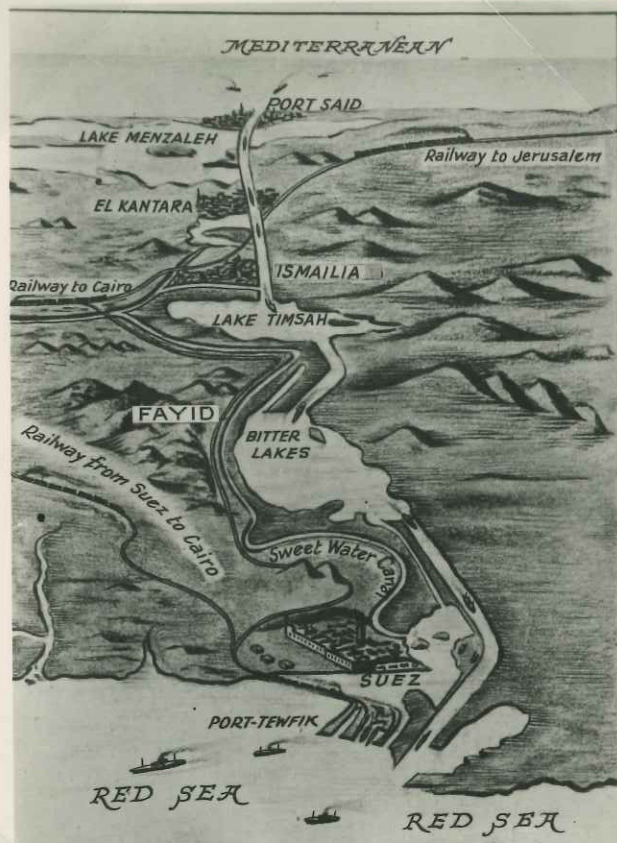
脇村は欧米留学時に交通手段として汽船を利用し、様々な国や地域を旅した。その都度、汽船を図案にした絵葉書を日本に送った。アイルランドへはウルスタークイーン号（訪問時には造船所も見学した）、北欧へは照国丸、米国へはクイーンメリー号、そして米国から日本への帰途は秩父丸と、それ以外にもさまざまな汽船を利用し、その都度、汽船の絵葉書を母国に送った。ここでは『欧米留学だより』の最後に掲載された秩父丸（後に鎌倉丸と船号変更）の絵葉書と同じのものを掲示する。また脇村の絵葉書には、海上輸送路としての運河への興味、また石油会社（スタンダード石油訪問など）について詳細に書かれている。その都度、関連する図案の絵葉書が選ばれていた。運輸や石油産業への脇村の研究者としての関心がわかる。

帰路で乗船した秩父丸。同船から送った絵葉書と同じ絵柄のもの。



秩父丸からホノルル宛て実通便（1930 年）





THE SUEZ CANAL, was started on 1859 and finished in 1869 - Costing 30 Million Pounds.
Depth 29½ feet. The Width 213 to 300 feet.
It shortens the passage to India by 7600 Miles.

脇村が最初に見た世界的運河は、1935年10月にみたスエズ運河である。脇村の視点は、物流の手段としてのタンカー（油槽船など）や旅客船、そして飛行機などに注がれた。また運河はそれらを世界の大海や陸地と結びつける点でも留学時代から重視した。左は35年10月に運河を通り、ナポリ到着時に日本に送った絵葉書と同図案のもの。

脇村の留学時はちょうどベルリン・オリンピックが行われていた。脇村も何度か観戦し、その模様を描いた絵葉書を家族に送っている。下はベルリン・オリンピックの特印が押された当時の封書（脇村が送付したものではない）。脇村の留学時に、日本はドイツとイタリアと密接に同盟関係を構築し、他方で日中戦争がはじまり、日本は本格的な戦争の時代に入突する。脇村も帰国後は、人民戦線事件に巻き込まれ、東京帝大の職をおわれ、苦難の時代を迎える。



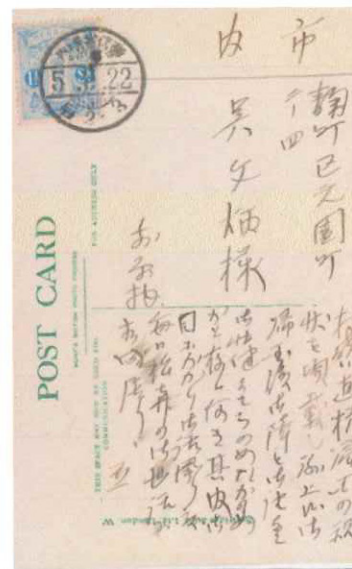
Lutz Auerdt.

Leipzig - W. 35.

Pfingstweide 23. ptr. n.

脇村はロンドンを拠点にして、アイルランド、北欧、そしてドイツなどの欧州各国を旅した。多くは汽船を利用したが、時には飛行機も活用した。またロンドン日本人会にも加わった。当時の駐英大使は吉田茂であった。脇村はロンドンのロンバート街（世界の金融の中心地）にあるロイズ損害保険機構の図書室を借りて、そこでロイズの損害保険の歴史、経営を詳細なデータをもとにして勉強していた。またロイズの幹部たちや、他の証券会社の社長クラスとも交流し、またイギリスの貴族社会とも交流を深めていき、その関係は戦後も続いた。

1930年頃のロンバート街の一角（左：イングランド銀行 右：王立取引所）：当時の実通便



第一次世界大戦後、世界経済の中心はイギリスからアメリカに移行していた。脇村は1年8か月のイギリス留学を終え、その後はアメリカへ向かった。そこでも保険、石油、運輸についての実情を視察し、各主要企業の重役と会合し、見識を深めていった。以下の絵ハガキは、1937年10月4日に、脇村がヒューストンから日本に送った絵葉書と同図案のものである（脇村が送付したものではない。1951年の実通便）。ヒューストン運河が描かれている。脇村はテキサスでスタンダード石油の製油所を見学してから、ヒューストン運河にいき、船に乗って湾や棉花積出の施設を見学した。



切手の経済的価値：切手発行益

世界の国々では自国内や海外とのやり取りで郵便を利用している。この郵便サービスの利用料として切手を封書やハガキなどに貼ることは世界共通の手法だ。もうひとつこの切手には重要な役割がある。それは“使われずにずっと手元に置かれていること”だ。これは切手収集の対象や、あるいは未使用切手を資産運用の代わりとしている可能性がある。切手の額面料金×売り上げ枚数から切手の製作・切手自体の配布などのコストを除いたものが、切手を発行する主体の利益になる。このことを「切手発行益」と表現しよう。切手のコレクターが郵便に利用しないで手元に切手をためておけばおおくほどに、この切手発行益は増加し、それだけ発行主体の儲けにつながる。特に外貨獲得は様々な国の切手発行の主目的となってきた。また国によっては厳密に、外貨獲得のための切手と郵便に利用する切手とを別建てで販売しているところも多い。前者を「いかがわしい切手」という（参照：内藤陽介（2011）『事情のある国の切手ほど面白い』メディアファクトリー新書）。

脇村もこの私が名付けた「切手発行益」や、内藤氏のいう「いかがわしい切手」について、『趣味の価値』で言及している。国家の財政収入のために、欧州の小国が美しい切手を発行しているとして、「たとえばモナコは大公とグレース・ケリーとの結婚記念切手をだして相当の収入を得たことが伝えられているように、自国と関係のあることで出すだけでは材料不足で、しばしば自国と関係ないものまで出している」（脇村、103-4頁）と解説している。以下はそのレーニエ三世とグレース・ケリーの成婚記念切手である。モナコは以後もさまざまなグレース・ケリー切手を発行し続けて今日に至っている。またグレース・ケリー（だけではないが）の「いかがわしい切手」も多く国が出している。

グレース・ケリー&レーニエ三世ご成婚切手（1956年）とそれ以後にモナコが発行した様々なケリー切手



内藤陽介&田中秀臣対談の記事 (2019年)

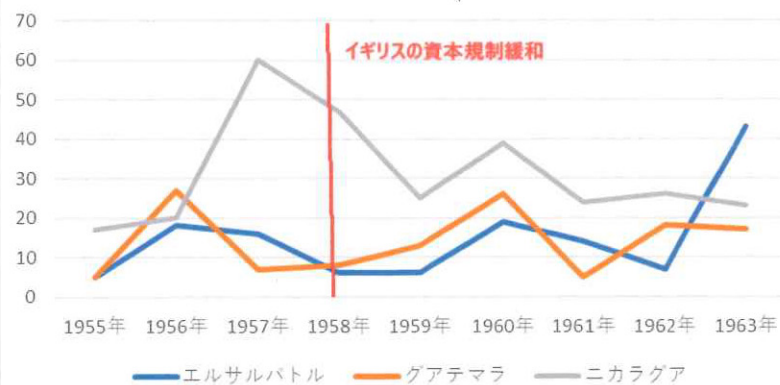


切手発行益（続き）

脇村は切手発行益に関して、ドルで対外決済をしていた中米の国々（エルサルバドル・グアテマラ・ニカラグアなど）に注目して、「中米の小国のうちにも財政収入を意図して切手を出す国があるが、中米の国々の切手はドル貨でないと入手できないので、ドル貨不足時代には売るのが困難していた」（脇村、104 頁）とした。IMF（国際通貨基金）の八か条国で、ドルで対外決済を要していた三か国を取り上げてドル貨不足時代（1955 年から数年）と 1964 年のポンド危機以前までの三か国の記念切手発行数の動向をみておこう。特に図中では、1958 年に注目してる。これは脇村が「1958 年からイギリスは、切手の購入のための外貨を制限しなくなったので、ドル貨を必要とした米州各国の切手は相当イギリスの切手市場に流入されることになった。中米の国々はこの機運に生じて、ますます多くの切手を発行しはじめたのではないかと思う」（105 頁）、とあるからだ。

脇村の予想に反して、特に 58 年以降、継続して以下の三か国で記念切手の増発はみられない。

中米諸国記念切手発行推移（1955 - 63 年）



日本は第二次世界大戦後、国際通貨制度（IMF）に加盟したのは 1952 年、64 年には総会を東京で開催。



切手の経済的側面：規制

脇村は切手が為替管理以外にさまざまな規制を受けていることに注目した。特定の国や地域の切手が国際的利用されことや、国内持ち込み、所持などを禁じる規制である。脇村が例示したのは、中国が認めなかった満州切手や、また韓国の竹島切手（1954年、三種）などである。脇村は竹島切手を日本政府は承認しなかったとするが、国際郵便連盟に加入しているため、竹島切手を貼った日本宛てのステーションナリーを確認することができる。以下は、1954年の竹島切手三種である。

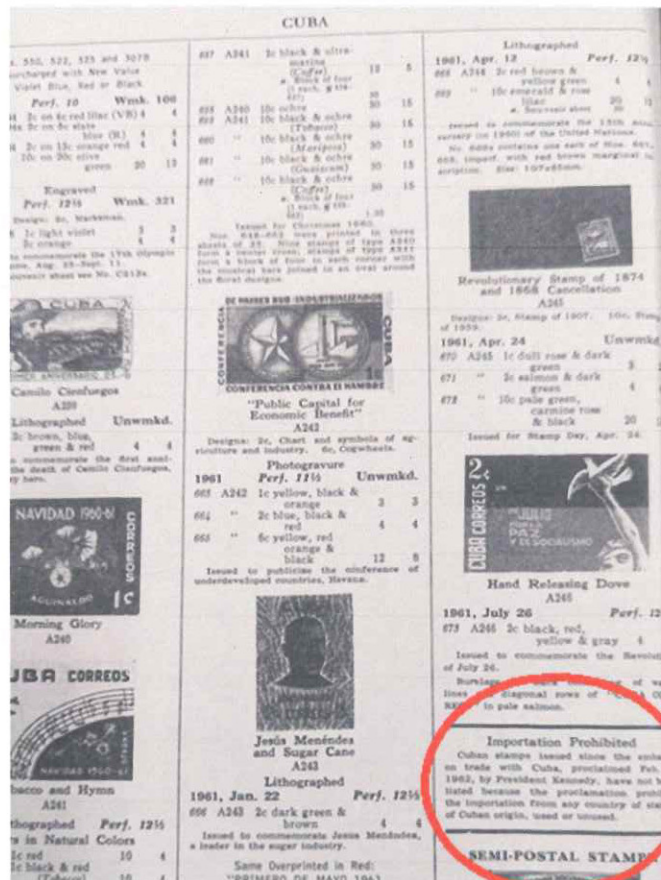


竹島同様に、日本の領土を、不法に他国の領土とする切手が発行されている。先の田中・内藤対談でも話題になった尖閣諸島の切手である。中国旗を尖閣諸島の写真にかざし、暗に中国に領有権があることを匂わす切手（2012年）だが、ただ発行したのは、ギニアビサウである。中国からの経済援助を同国は期待しているが、そのせいなのかどうかは不明である。なお現時点で、習近平政権はギニアビサウを戦略的パートナーシップの対象国としている。



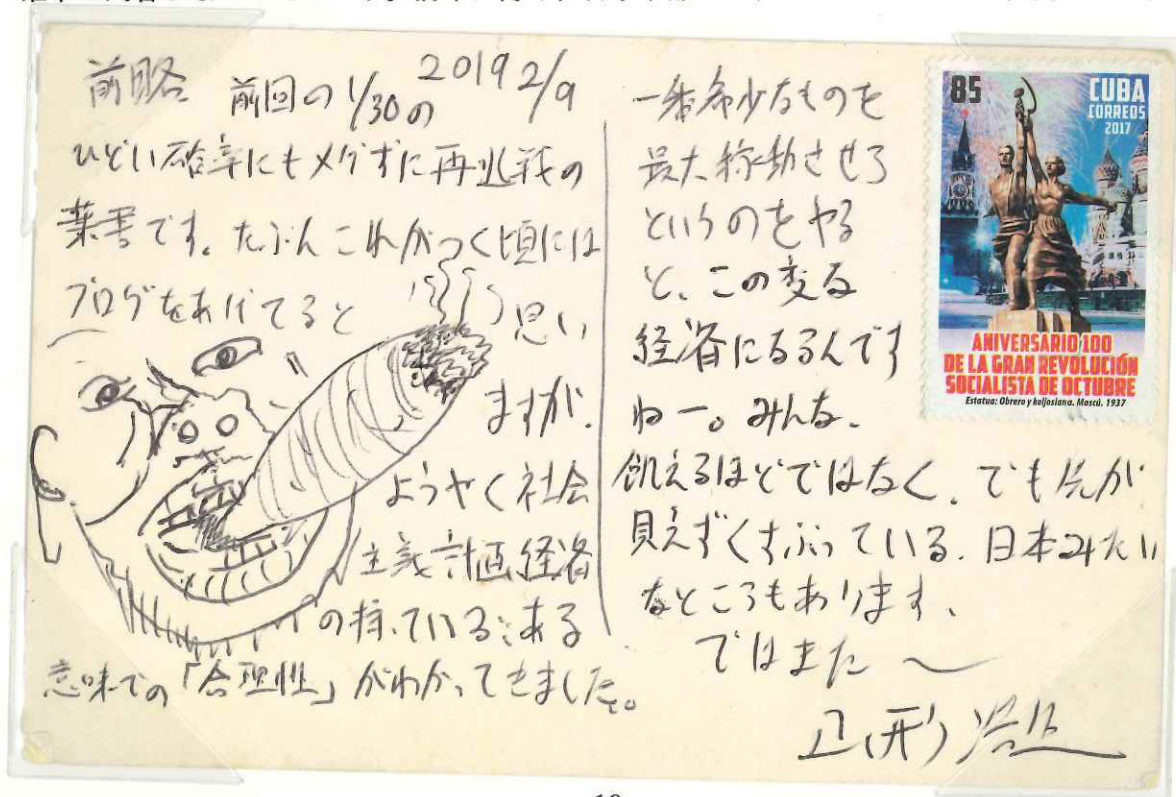
脇村は、米国がソ連の切手には規制をかけていない一方で、中華人民共和国、キューバ、北ベトナムについて『趣味の価値』が発刊された1967年の段階で、「その輸入はむろんのこと、アメリカ人は合法的には、売買、所有もできないことになっている。それらの国々の原産品一般の輸入について制限されているのと、切手も同様に扱われている」（脇村、105頁）とした。また切手カタログでのスコットもこれらの三か国は掲載せず、『趣味の価値』が出た数年前には、新たにキューバも1962年2月7日のケネディ大統領の命令で同様の措置が採用されて、スコットはその旨を記して、61年7月26日以降のキューバ切手を掲載していないとした。脇村はスコットは米国以外でも参照されるのだから、このスコットのやり方は適切ではない、と批判した。

右に掲載したスコットカタログの赤丸にケネディ大統領の命により61年7月26日以降の切手不掲載の旨の記述がある



スコットカタログ（1963年版）

米国のキューバへの経済制裁は今日も継続している。ただし郵便については両国間で送付可能である。またキューバから日本への郵送することができる。以下は、評論家・翻訳家でもある山形浩生氏から出品者に送られたハガキである。2017年に発行されたロシアの10月革命100周年切手貼付。キューバから日本にハガキを送付しても高い確率で到着しなかったという。消印は薄く、切手下部にわずかにインクがつく程度である。



米国は、北ベトナム切手に対しても上記の規制をかけた。北ベトナムはさまざまな切手のデザインで、“反米”姿勢を鮮明にした。内藤陽介『反米の世界史』（講談社新書、2005 年）は、北ベトナムだけでなく、キューバ、中国、イラン、北朝鮮などの反米切手が解説されていて、脇村の本を十分に補い、かつ進展させている。ここでは同書を参考にしながら、北ベトナムの反米切手をいくつか

ベトナム、中国、ソ連の「三国友好月間」（1950 年、1954 年）の切手。50 年のものは、ホー・チ・ミンの顔が毛沢東の方を向いている。54 年では、ホー・チ・ミンの顔は、毛とマレンコフ同様に正面である。内藤はこの顔の向きに、ベトナムの中国への政治的溫度差を見出していて興味深い。



キューバとの連携を示す、キューバ建国 6 周年を記念する北ベトナム切手



反米切手の代表格。米軍機撃墜の記念切手、各種。数字は撃墜数。最後は 4181 機まで撃墜記念切手（1973 年 10 月 10 日）を発行したが、この切手以降は、同年 8 月にアメリカ軍撤退により、インドシナ戦争は終了したため、反米色の強い切手は発行されなくなる。



規制（続き）

脇村は、国によっては未使用の切手の輸出を禁止しているところがあるとしている。これは為替管理の一貫であろう。第二次世界大戦時のソ連の切手はそのケースに該当するとして、脇村はふたつのケースを紹介している。

テヘラン会談記念切手（1943 年）と同盟の記念日（1944 年）

脇村は「テヘラン会談記念切手」として両者を 1944 年発行と一括している。



レーニン没後 20 周年記念切手（1944 年）

脇村が掲示したのは、レーニンの幼少期からの肖像とレーニン廟のみだが、スターリンを前面にだしレーニンを背後にした「ダブルフェイス」切手は、スターリンの権威付けにレーニンを利用した点で重要な切手である。



国際宣伝としての切手の発行

ソ連の記念切手の海外持ち出し禁止は、次第に緩んでくる。特にスプートニク1号の成功をうけて、その記念切手やまた宇宙ロケットのさまざまなイベントを切手にし、積極的に対外プロパガンダに利用していった。「ソ連は1957年人工衛星打ち上げの成功を記念して早速切手を発行したが、その切手は未使用のまま海外に輸出した。人工衛星打ち上げの成功に関しては、さらにソ連圏の国々が続々と記念切手を出してそれを海外に売り出している。ことにルーマニアはライカ犬入りの切手まで出している。むろんこうした切手は、財政収入を計るよりも、打ち上げ成功の国際的宣伝をねらったものである」(脇村、107頁)。

ソ連のスプートニク1号成功記念切手(左:11月、右:12月発行:同図案)とルーマニア発行



ルーマニアのライカ犬切手とその切手の切手。実際のライカ犬の様子は米国で発行された風船ガムのおまけカードのイラストに近いという。左下はソ連発行のスプートニク2号記念切手。



風船ガムのおまけ

国際宣伝としての切手の発行：バチカンと国連

脇村はバチカン市国がカトリック布教手段として切手を利用していると注目した。「ここの切手はヴァティカン内の郵便局で売り出し、そこで郵便物に貼付すればイタリアはむろん海外に発送することもできるが、ローマ市内の郵便局では少しも通用せず蒐集の対象としてしか価値はない」(脇村、107-8頁)。

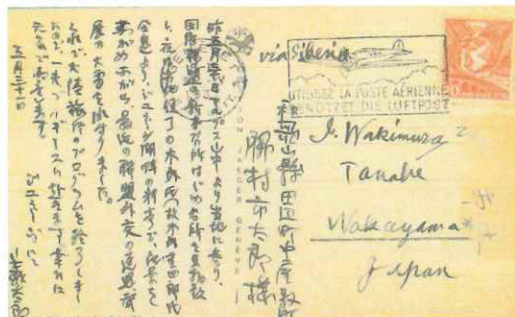
バチカンから米国への国際便 (1966年5月17日)



バチカン発行の最近の切手。ラファエロ受胎告知、画家ティエポロ没250年、ベネディクト16世追悼。



脇村は国連の活動を宣伝する特別切手にも言及している。国連切手が1951年から発行され、国連のニューヨーク事務所内の郵便局からは、米国が認可したので海外に送れるが、脇村の著作が刊行された当時では、ジュネーブ局から海外に送ることは不可能だったことにもふれている。「国連の社会経済理事総会は、ニューヨークではなく年々ジュネーブの元国際連盟の建物（パレ・デ・ナシオン）の中で開かれることになっている」（脇村、108頁）とわざわざ書いているが、1937年5月末に脇村は当地を訪れ、現地から絵葉書を日本に送っている。その時の絵葉書の図案は、このパレ・デ・ナシオンだった（下は、脇村（2000）より複写）。



1951年の国連の最初の切手。



現在は国連ジュネーブ局から郵送可能である。チューリッヒ宛の実通便。



国際宣伝としての切手の発行：スエズ運河国有化

「宣伝という意味で特に話題をまいたのは、スエズ運河の国有化に際してエジプト政府の発行したいくつかの切手である。国有化をナセルが発表するや、ただちに立派な、スエズ運河国有化記念切手を出したのである（1956年7月26日）、英・仏がスエズ地帯に侵入しはじめると、エジプトは防衛切手をだした（1956年11月）。そして英・仏が撤退すると、その防衛切手の上に撤退日を加刷して勝利を祝った（1956年12月22日）。…スエズ戦争と関連して士気昂揚のために、歴史上エジプトに侵入した外的撃退の記念切手シリーズもそのときに発行した。さらに1961年と66年にエジプトは運河国有化5周年と10周年記念切手を発行して、運河経営の成功を宣伝している」（脇村、108-9頁）。



「そしてスエズ運河が再開されて船舶の通行ができるようになると、大きな再開通記念切手を出して、これを祝い宣伝した。あまりに迅速もスエズ運河を再開したため、運河閉鎖を理由に運賃暴騰でブームに浮かれていた世界海運界は冷水をあびせられ大きな打撃をうけた」(脇村、108-9頁)。



左3点は
最近のスエズ
運河切手



最近（2021年）では、日本の企業が保有し、台湾の運行会社の汽船エヴァー・ GIVEN が座礁し運河が閉鎖してしまったが、その後、再開した。その事件を記念した切手が発行されている。切手は座礁した船舶とその後の様子を両方示している。

国際宣伝としての切手の発行：ヌビア遺跡移転

脇村は、エジプトのスエズ運河国有化のいわばスピンオフとして、アスワン・ハイ・ダム建設により、ダム上流のヌビア地方のアブシンベルの巨神像などの遺跡が水没することになったことに注目した。この遺跡の水没の危機を、ユネスコが中心となって遺跡の移動など救済とそのための国際宣伝運動を展開した。エジプトはもちろん世界各国 40 か国以上が、救済をテーマにした記念切手を発行し募金活動に助力した。



最近の国際宣伝としての切手：連帯と分断

脇村が注目した国際宣伝としての切手の役割は、最近ではロシアによるウクライナ侵攻でより鮮明になった。ウクライナは積極的に自国の戦意高揚や国際的な連帯をよびかける切手を多く発行している。世界で人気があり、それは切手発行益をウクライナにもたらし、またウクライナ戦争での国際的な関心を高めるのに成功している。また欧州各国もウクライナへの支援と連帯を強調する切手を発行している。ただしその種の連帯を示していない欧州の国もあることは見逃すべきではない。またウクライナ戦争と異なり、イスラエル・ガザ戦争についてはより「分断」が鮮明である。現在までマレーシアがパレスチナへの連帯を呼びかける切手を発行している以外に、イスラエルにもパレスチナ（ガザ）双方に支援・支持を表明する国際宣伝としての切手は、私の知るかぎり出ていない（2024年12月現在）。イスラエル・ガザ戦争の国際政治における複雑性を示しているのかもしれない。



脇村は、第二次世界大戦後、各国独自の切手の中で目立つジャンルとして、美術切手と石油切手をあげた。脇村によれば、石油切手は「社会経済的宣伝の意味」であり、また美術切手は「そうして宣伝よりももっと純粹の芸術的意図からであろう」とした。脇村（1967）には多くの美術切手の画像が掲示されている。

「美術切手といえはすでに戦前（1930年）スペインはゴヤの肖像切手を多数発行すると同時にマヤ夫人像を三枚のシリーズで出して世界中を驚かしたことは人々の記憶しているところである」（脇村（1967）111頁）。



美術切手への関心：日本の浮世絵切手

脇村は文化芸術の領域での貢献も多い。東京都美術館などの運営に関与し、岸田劉生や佐伯祐三らの絵画の収集や研究でも著名だった。没後、その収集品は郷里の田辺市市立美術館などに収蔵されている。脇村（1967）では、日本の浮世絵切手、フランスの美術切手シリーズ、モナリザなどを図版つきで紹介した。





脇村（1967）で言及されたか、または図版が掲示された美術切手を紹介していく。特にゲルニカについては、ピカソはスペインの町ゲルニカへのファシストの猛爆に対して批判の意図を込めて描いたが、この原画は貸与されて現在、ニューヨーク近代美術館にある。「ヴェトナム北爆の続けられている折柄、皮肉な「芸術の運命」を考えさせられる」（113頁）と記した。ピカソはポーランドの鳩の画切手も紹介した。



脇村は「ゲルニカはチェコスロヴァキアから切手に採用されているが、スペインはいつになったら、彼の画を切手に採用するのだろうか」としたが、以下はスペインからのピカソ生誕 100 年記念のゲルニカ切手。



脇村（1967）が言及ないし掲示した切手。スペインは、エル・グレコ、ヴェラスケス、ムリロ、ゴヤに言及。



『趣味と価値』では、石油で成功した財界人の美術蒐集も論じた。石油と美術という脇村のふたつの関心がクロスしていて、熱が入ったのか当該書の中で最もページ数が多い。ロスチャイルド、ロックフェラー二世、グルベンキアン、ゲッティ、松方幸次郎、出光佐三らを取り上げられているが、ここでは財務長官でもあったアンドリュ・メロン関連に絞る。メロンは清算主義（緊縮政策）で有名だが、美術蒐集は緊縮しなかったのは確かだ。



上はA.メロン生誕100年切手。左は1924年に発行されたガルフ石油の広告封筒の実通便。



アンドリュ・メロンはワシントン・ナショナル・ギャラリーを創設し、またメロンの子供たちは積極的に同館に美術品を寄贈した。左は同館のラファエロとダ・ヴィンチの作品を描いた切手。

石油人と美術の関係は、今日、一部の活動家の抗議の対象にもなっている。写真は環境団体「ジャスト・ストップ・オイル」がロンドン・ナショナルギャラリーのゴッホ「ひまわり」にトマトスープを浴びせた出来事。右はスウェーデンの環境活動家でやはり石油産業に厳しい批判を展開するグレッタ・トゥーンベリを顕彰する切手。



© Just Stop Oil

石油切手への関心：石油国有化

脇村の学術的な関心として石油問題があった。切手についても戦後の新しい動向として石油切手と美術切手に注目した。石油切手については、石油の国有化と石油切手の興隆を関連させた解釈を提起していた。

「石油は石炭とともに戦前あまり切手にはとりあげられなかった。アメリカも石油切手らしい切手は1959年8月ドレーク油井100年記念まで出さなかったといってもよかった（この100年記念切手の図案はあまり評判はよくなかった）。多くの中米や中近東の産油国では戦前はまったく外国資本の事業で国内資本にとっては興味がなかったのかもしれない」（脇村（1967）、111-2頁）。

「戦後は事情が一変した。1953年はイランにとって記念すべき年であった。石油国有化を断行した。テヘランに近いクムで自分たちの手ではじめて噴油をみた。この二つの事件を記念するための二つのシリーズの石油切手をつづげざまに発行した」（同、112頁）。



ドレーク油井記念



「中近東の国々は石油業にめざめ、国家主権の干渉権を拡大し、さらにアラブ石油会議や石油輸出機構の結成に成功した。政治的にはアラビア半島の半独立国や北アフリカの国々はこのころ続々と自主権を回復し、切手発行権をもつにいたった。そしてイランにならって続々と石油切手を出しはじめた」（同、113頁）。

脇村は1962年のアルジェリアの独立後に、旧宗主国フランスと同じ図柄のサワラ、ハッシー・メサド油田の開発記念切手を著作の中で並べた。

国家独立と石油国有化、そしてその宣伝としての石油切手の発行という解釈を脇村は示した。



石油切手への関心：石油国営化（続き）

中東や北アフリカの国々の石油国営化後の経済発展、世界のエネルギー市場の動向など、脇村は生涯その研究を続けた。また最近でも米中貿易戦争、ウクライナ戦争と石油をめぐる国際情勢は大きく変動している。ここでは産油国アラブ首長国連邦の最近の建国記念日切手で、同国の過去、現在、未来が描かれているものを紹介する。



石油切手への関心：国際石油会議

脇村は渡欧前年（1934 年）滞在先であったロンドンで始まった国際石油会議についても生涯関心を抱いていた。脇村（1967）でも国際石油会議の切手を紹介した。以下は同書で掲載された同じ切手（第四回会議、ローマ）と初日カバー（第7回会議、メキシコ）。



脇村自身がどのような切手蒐集家だったのかはよくわからない。ただ脇村（1967）に掲載された切手は本人の所有のものと思われるし、切手への関心は晩年まで継続していたようだ。また脇村（1967）では、著名な切手蒐集家とその蒐集された切手の処分時の価格が紹介されている。

「切手の専門家は、切手はけっして投資のために蒐めてはいけないといっている。しかしながら、良いものを蒐めると、なかなか有利な投資になるといわれている」（脇村（1967）114 頁）とした上で、イタリアのフェラリの蒐集品が、フランス政府に敵国資産として没収・売却され、当時の時価で 200 万ドルであったことを紹介している。現在の円換算だと 12 億円ほどである。また米国の蒐集家アルフレッド・H・カスパリーの個人コレクションの競売価格（現在の時価で 100 億円ほど）や、また音楽切手の蒐集家として著名なセオードル・エドウィン・シュタインウェーのエピソードを紹介した。シュタインウェーはスタインウェイピアノで財をなした一族のひとりで、「彼は音楽切手に音楽家、作曲家のサインをしてもらっていた。パデレウスキーはシュタインウェーのために自分の切手にサインをしたといわれているが、彼をアメリカに招いて音楽家として成功させたのはシュタインウェーであった」（脇村（1967）118 頁）。イグナツィ・パデレウスキーは世界的ピアニスト & ポーランド首相。

シュタインウェーのコレクションの競売価格にふれたあと、F.ルーズヴェルト大統領が切手の愛好家であり、彼が切手を眺める図面切手があることを紹介し、そのコレクションは「めずらしいものはあまりない」という定評に反して、競売価格は高かったとしている。

左からフェ拉里、シュタインウェー、スタインウェイピアノ（上）、パデレウスキー（下）、ルーズベルト。



脇村は名前をあげていないが、日本で著名な切手蒐集家・切手蒐集の啓蒙家であり、また広義の経済学専門家（交通・通信分野）で著名だった人物に三井高陽（1900 - 83）がいる。特に交通経済学の日本の開祖であり、ケネー研究でも著名だった増井幸雄との共著『世界軍事郵便概要』（1939 年）や、第一次大戦後のハイパーインフレ期を扱った『独逸インフレ切手概説』（1956 年）は、経済学関連として重要である。三井のコレクションは競売されることなく、他の貴重な文献・史料とともに三井文庫が保存している。以下はドイツのハイパーインフレ期の切手である。最高額切手は右端の 500 億マルクである。



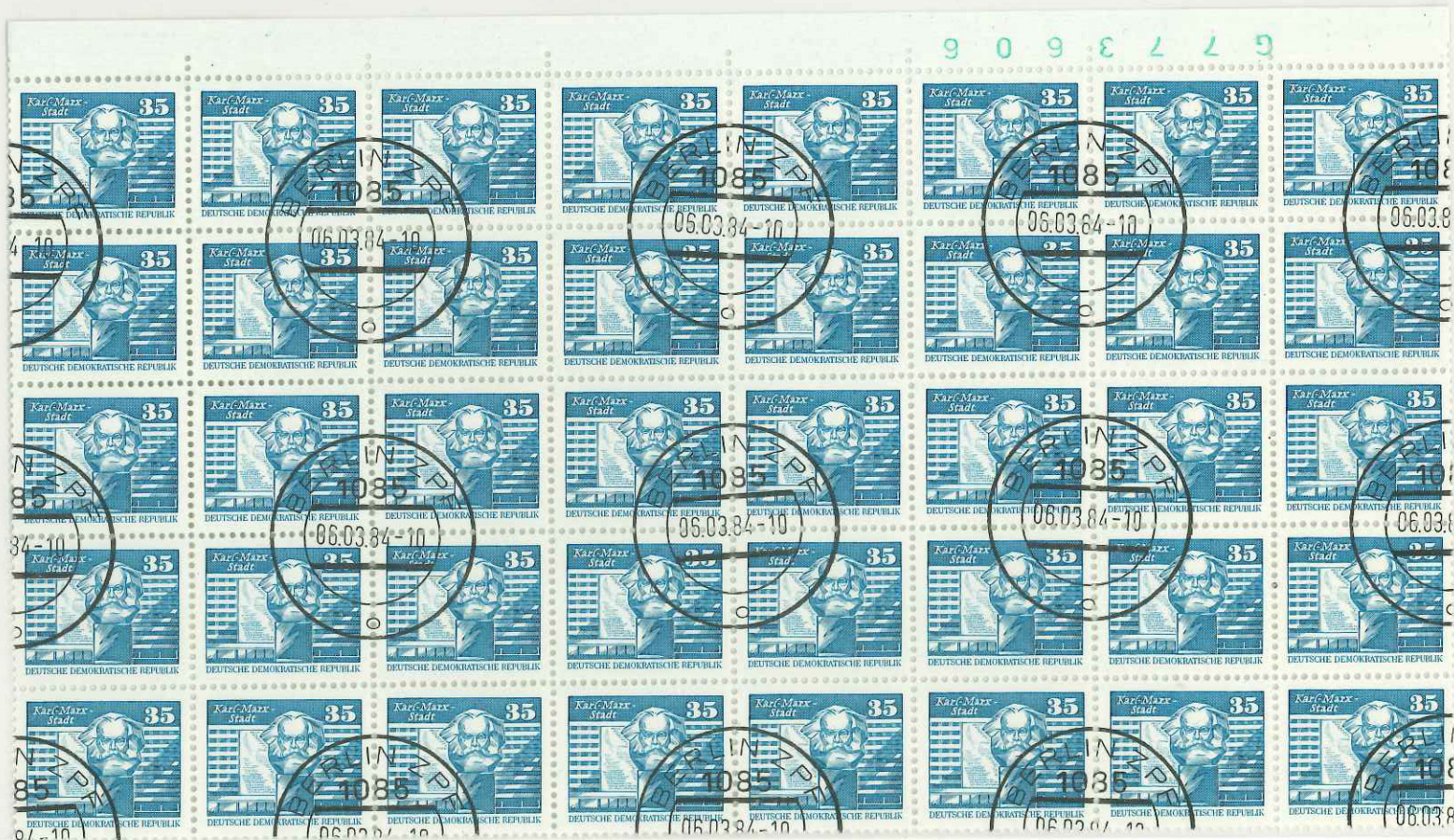
カール・マルクスの切手について、脇村は「私の友人のマルクス経済学者はマルクスの切手ばかり蒐集している。これも第二次世界大戦後東欧その他の共産圏諸国から発行されるようになって増加したようだがまだ100枚にはならないし、価格も余り高くないので蒐集はそれほど困難でないはずだが完全にそろえることは決して容易でないと語っている」(115-6頁)と述べている。この「私の友人」は、おそらく鈴木鴻一郎のことだろう。鈴木はマルクス切手について、著作『「資本論」と日本』(1959年、弘文堂)、『資本論偏歴』(1971年、日本評論社)の中でかなりの紙数と情熱をこめて解説している。また杉原四郎はマルクス切手を自分の著作の中に何度も図表を掲示し、また関連するエッセイを多く書いた。杉原には『切手の思想家たち』(1992年、未来社)という切手に関する単著まである。海外でもいくつかのマルクス切手の文献が出ている。代表的には、Gothard Feustel氏のエレガントな豆本である *Karl Marx auf den Briefmarken der Welt* (1989年: Dietz Vlg Bln)。またマルクス切手については、脇村は100枚としたが、Feustel本では194枚、田中の試算では240枚超まで増えている。



杉原『マルクス経済学
の道』口絵(1964年第一
インターナショナル
記念の各国切手。



東ドイツ発行の普通切手の注文消し。現在ドイツのケムニッツにあるカール・マルクスのモニュメントの図像。



東ドイツ（当時）のマックス主義・レーニン主義研究所から、著名なマルクス経済学者でもあった同志社総長、住谷悦治に送られた封書。1975 年当時、住谷の撮影した戦前ナチスによるローザ・ルクセンブルクの墓荒しの写真が同研究所に寄贈された。それをめぐるやり取りでのもの。



2018 年のマルクス生誕 200 年が、中国政府の習近平体制の自己正当化に利用されたことは各国で注目された。マルクス生誕 200 年というイベントは、またマルクス切手の在り方についても再考する機会となった。特に中国がドイツのトリアーに寄贈したマルクス像をモデルにした切手など二種類発行したことは注目に値する。ドイツではこの彫刻の寄贈をめぐる中国の政治的プロパガンダではないかとする論争が起きた。さらに『共産党宣言』中国語全訳 100 年記念切手も発行された。いまだ政治的なプロパガンダとしてもマルクス切手は有効なのかもしれない（田中（2019）より）。



私にとつては、なつかしい飛行機です。クロイドンまで送っていただき、
 修理していただき、多分父あそこへ送った郵便が、今全部保
 存されており、したがって、船中のものも多数出てまいりまし
 て、整理をすれば、日記代用になりそうです。
 山下さんの小文も同封します。「掃」などという古い難字
 の合本を別便にお送りします。何かの役に立つことがあれば幸
 ひです。

木村 一郎様

1983 六月十九日

脇村 義太郎

脇村の後期の著作に『油槽船の研究』（1982 年、
 自費出版）がある。左の書状は、同著を戦前の滞
 欧中に知り合った木村一郎（山下汽船副社長）に
 献本した際のものである。脇村は油槽船（タンカ
 ー）への関心を滞欧中から晩年まで終生持ち続け
 た。脇村（1967）に船切手への言及が多いのもこ
 の油槽船や汽船などへの滞欧中からの関心と経
 験によるものだったろう。下は最近の石油タンカ
 ー切手である。



おわりに 脇村義太郎の業績を切手解釈から照射する

脇村（1967）の一章「国際商品としての切手」はたかだか 16 頁にしかすぎない。しかしそこで展開された脇村の切手世界への関心と解説は、特に国際宣伝（プロパガンダ）の手法として切手をみることによって先駆的であり、また本展示の用語でいえば「切手発行益」を基軸にした各国の切手戦略、国際通貨制度との関係やまた切手利用の規制など、国家と経済との関係を多角的にみている点で経済学者らしい独自のものだった。個別のテーマでみても、石油や運河、そして美術切手などについて当時だけでなく、今日でもユニークな視点があつた。例えば石油人と美術品の関係は、本展示作にも示したように、環境問題など発展性があるテーマだろう。また最近、復刊された岡田芳朗『切手の歴史』（2024 年、講談社：原本は 1976 年発刊）の主要内容を凝縮し、先駆している点でも興味深い。そして、脇村『欧米留学だより』を活用することで、脇村の学術的な関心が、靖国丸などでの汽船の旅、スエズ運河の目撃、さまざまな滞欧体験にルーツをもつこと、それが彼の「国際商品としての切手」という短いが珠玉の切手解釈の中にも反映されていることを明らかにした。その意味で、本作は切手などマテリアルを通じたひとつの経済思想史研究でもある。